

# ロマン主義時代の生命観

—— ジョン・ブラウンとドイツ・ロマン派 ——

## 菅 谷 憲 興

フローベールの遺作『ブヴァールとペキュシェ』の第三章前半、ふたりの主人公が医学に取り組むセクションに、次のような一節がある。

かくして、彼らは医学哲学の領域に迷い込んだ。

ファン・ヘルモントのアルケー、生氣論、ブラウン学説、器質病説などについて、あれこれ夢想をふくらませる<sup>1)</sup>。

医学哲学の代表として名を挙げられている四つの学説は、各々医学史上の異なる時代に属するものであり、おおむね年代順に並べられている。ファン・ヘルモント（1577-1644）は十七世紀のフランドルの医師であり、アルケー *archée* とは生命をつかさどる生氣のことを指す。生氣論 *vitalisme* は昔からある理論だが、フランスでは十八世紀にモンペリエ学派の医師たちがこれを主張し、生命原理 *principe vital* の仮説によって物理化学の法則には還元できない生命現象を説明しようと試みた。一方、器質病説 *organicisme* はすべての病気の原因をなんらかの器官 *organes* の損傷に帰するものであり、十九世紀フランスの医学界ではこの唯物論的な理論が生氣論と激しく対立したことが知られている。

ところで、ここで注目したいのは三番目に挙げられているブラウン学説 *brownisme* である。十八世紀のスコットランドの医師ジョン・ブラウン（1735-1788）は、神経症という語の創始者として知られるウィリアム・カレン（1710-1790）の弟子であり、前世紀の中葉にフランシス・グリソン（1596-1677）によって作られた刺激感応性 *irritability* (*irritabilité*) の概念に触発され、『医学要覧 *Elementa Medicinae*』（1780）において独自の医学体系を提唱した。自らをニュートン（1642-1727）になぞらえ<sup>2)</sup>、それまで「推論にもとづく術」でしかなかった医学を「生命科学と呼ぶことのできる確実な科学<sup>3)</sup>」に押し上げたと自負するブラウンだが、同僚の敵意を買

うその奇矯な性格や振る舞い、また借金を重ねて破産するという乱脈な生活もあいまって、当時イギリスではほとんど評価されなかったという。それがなぜフローベールの小説に名が出てくるのかというと、ブラウンの死後、まずはイタリア語、それからドイツ語に翻訳されたその著書が、特にドイツでは新興のロマン主義運動と結びついて大流行したという事情があるからだ。しばしば指摘されるように、ドイツのロマン主義は他国のそれと違って、文学、絵画、音楽といった芸術・文化の領域のみならず、医学や化学などの科学にも積極的にかかわっていた。ブラウン学説はまさしくロマン主義医学を代表する理論だったのであり、十八世紀末から十九世紀初頭のドイツにおいて、医術の専門家の枠を超えて、文学者や哲学者にまで広く刺激を与えたのである。

## 1. 生命と刺激

それでは、ブラウン医学の具体的な内容を見ていこう<sup>4)</sup>。その理論的骨子はきわめて単純であり、あらゆる病気は二つの形態、すなわち炎症性の病である強力状態 *sthénie* と抗炎症性の病である無力状態 *asthénie* に分類されるというものだ。前者は刺激の過剰に、後者はその欠如に由来し、治療法としてはそれぞれ衰弱剤と刺激剤が有効だとされる。要するに、病気はあくまで生体に作用する刺激の問題、それもその質ではなく、単に量の問題であり、それを治すには外から加わる刺激の強弱を調整してやるだけで十分だということになる。言い換えれば、過多な刺激、あるいは不十分な刺激は病の原因となるが、ほどよい刺激は安定した健康をもたらすというわけだ。ただし、理念的には見事なシンメトリーを描くかに見えるこの病因論も、現実にはほとんどの病が無力状態に起因するものだというのがブラウンの主張である。それ故、大抵の場合、処方として適切なのは強壯剤であり、アルコール、阿片、カンフルなどを用いて刺激を与えることが勧められる。逆に、当時まだ日常的に行われていた瀉血は、下剤や食餌療法といった心身を一時的に弱らせるための他の療法とともに、有害だとして退けられることになる。

では、このような一元論的な医学思想の基盤にある生命観とはどのようなものであろうか。ブラウンによれば、「生命とは強いられた状態 *état forcé* であり、あらゆる生体はつねに自らの破壊へと向かう傾向がある<sup>5)</sup>」という。つまり、生命の常態とは死にほかならず、それ自体では自らを維持する力をもたない、生が生であり続けることができるのは、むしろ異質

な諸力のおかげであり、生命現象とは外部からやってくる刺激に反応することであらうじて成り立つものなのだ。まるで自律性をそなえた生体というよりは、誰かに操られる自動人形を思わせるかのような記述だが、事実、「この学説の根本的な原則」によれば、「我々は自分自身では何ものでもないものであり、外的な諸力に完全に従属している<sup>6)</sup>」のだとされる。

ところで、生命を生命ならざるものと分かつもの、すなわち生体の特異性は、この場合どこにあるのであろうか。まず確認すべきは、同時代の多くの医学者たちと同様、ブラウンが生命の大本となる第一原因を意図的に問わないことである。「原因という危険な問い」は「哲学の毒蛇<sup>7)</sup>」のようなものであり、人間の知性の及ばない難問にかかずらうことは避けねばならないというのがその理由であるが、このような姿勢には明らかにニュートンの影響が見てとれる<sup>8)</sup>。その上で、ブラウンが生命の主要な特性とみなすのが興奮性 *incitabilité* であり、これに周囲から刺激 *stimulus* が加わることにより引き起こされる興奮作用 *incitation* が生命現象の実質をなすことになる。従って、生体はそれだけで自足することはできず、「[外部の] 諸々の影響が取り払われるや、生命は不可避免的に停止せざるをえない<sup>9)</sup>」。生はたえざる刺激を必要とし、つねにそれに駆り立てられている必要があるのだ。

この理論が医学史的に見ていかに独特なものであるかを理解するには、やはりロマン主義時代のフランスで影響力をもったグザヴィエ・ビシャ (1771-1802) の思想と比べてみるのがよいだろう。『生と死の生理学研究』は十八世紀の最後の年である 1800 年に出版された名著だが、その冒頭に記されている生命の定義、「生とは死に抗する機能の総体である<sup>10)</sup>」という文はとりわけ有名である。生を死との相関性においてとらえるこの命題については、それが定義として成り立っていないという批判が（つまるところ、「生は生の反対物と対立するものだ」と言うにひとしい）、当時から少なからぬ著者たちによってなされてきた。とはいえ、ビシャもブラウン同様に、生命の第一原因にさかのぼることを自らに禁じている以上、その定義がある程度同語反復的にならざるをえないのはなにも驚くべきことではない。むしろそれよりも重要なのは、生命がここで戦いとして示されていることだろう。有機体はたえず周囲からの攻撃に脅かされており、自然環境や他の生物、あるいは他人からの有形無形の負荷にさらされている。生きるとは、その内実は不明だが、あらゆる生物が確かに自身のうちにそなえている生命原理によって、間断なく襲いかかる破壊の力に抗うことな

のだ。このような外界の圧力に対する反作用としての生命という考えが、バルザックをはじめとする十九世紀前半のフランスの作家たちをひきつけたことは容易に理解できる。エネルギーとしての生命のイメージは、世界に対峙する独立独歩の個人というまさにロマン主義的な主体のあり方を喚起するものではなかろうか。

以上のようなビシャの生命観に比べて、ブラウンの理論のある種の分けりにくさとは、生体が外部の刺激に本質的に依存しているため、それが独自の意志や責任を有する個体として振る舞うのに必要不可欠な自律性を欠いているかに思われることである。実際、唯物論的な機械論の立場に立つのであれ、また生命現象をつかさどる非物質的な実体を想定するアニミズムや生氣論の立場に立つのであれ、生命力そのものは有機体に内在するものとするのが普通であろう。ところが、ブラウン学説においては、生の原理はあたかも有機体の外部に位置付けられているかのようであり、医学史家シャルル・ダランベールの比喩を借りれば、身体は「刺激物によって生命を吹き込まれる彫像」のようなものとなる。もちろんその彫像には外の刺激に反応する「ある潜在的な力<sup>11)</sup>」、すなわち興奮性が元々備わっているのだが、すでに述べたように、ブラウン自身はその力の本性については一切問わないという立場を貫いている。生命は「不自然な仕方」でしか維持されない一方で、死は「自発的にもたらされる<sup>12)</sup>」と断言していることから考えても、生のプロセスが内発的なものではなく、受動的なものとみなされているという印象は否定しがたい。

最後に一点だけ、あらゆる生命現象を興奮作用の強弱に還元するこの一面的な理論が、その後の医学の発展に直接つながる側面をもっていたことを確認しておきたい。生理学と病理学の連続性にかかわるもので、後に哲学者オーギュスト・コント(1798-1857)が「ブルセの原理」と名付けるものである。実際、すべてが刺激の量の問題である以上、健康と病気の間に本質的な差異は存在しないといえる。それらは畢竟、「同じひとつの状態にすぎず、同じ原因に依存している<sup>13)</sup>」。病理的現象は健康な身体において作用しているメカニズムと完全に異質というわけではなく、あくまでその変調として理解されるべきものなのだ。生理的現象と病理的現象をひと続きのプロセスとして把握するこのような視点が、ブラウンからフランソワ・ブルセ(1772-1838)へと受け継がれ、さらにクロード・ベルナール(1813-1878)において近代医学の根本原理となったことはよく知られている通りである<sup>14)</sup>。特に有名なのが、ベルナールによって明らかにされた

糖尿病のメカニズムであり、正常な尿のなかにも微小ながら糖が検出されることで、糖尿病が通常の生理的機能の延長として分析できることが証明されたというものだ。このような実験医学の発見が可能となるには、個々の病を独立した実体とみなしていた伝統的な見方からの認識論的切断が必要となるが、それを最初に行ったのが、一見荒唐無稽なブラウン学説であったということはここで強調しておいてもよいだろう。

## 2. ロマン主義医学と自然哲学

以上見てきたような特異な理論が、では、なぜロマン主義時代のドイツでもはやされたのであろうか。まず注意すべきは、ロマン主義科学一般がほぼドイツ独自の運動であり、その思想的基盤となったのがシェリング流の自然哲学であったということだ。そこでももに問題になっているのは、「世界の脱魔術化」(M・ウェーバー)、すなわち我々の生きる世界が物理・化学法則に還元され、自然の全体が分析的理性によって数学化することに対する抵抗である。その際に最大の仮想敵となったのがほかならぬニュートンであり、たとえばゲーテ(1749-1832)は『色彩論』(1810)のなかでニュートン光学を激しい言葉で糾弾しつつ、その理論を「鼠と梟の古い巣窟<sup>15)</sup>」にたとえているし、またシェリング(1775-1854)も万有引力の法則について、それを「遠隔作用というナンセンス<sup>16)</sup>」と呼んで批判している。このようなロマン主義科学の主張は、現代の視点からはしばしば、科学の進歩を一時的に遅らせた反動として否定的に扱われることが多いが、少なくとも十八世紀から十九世紀への転換期に啓蒙の時代の遺産に対する揺り戻しがあったことはまぎれもない事実である。ロマン主義医学も同様に、前時代の機械論的もしくは感覚論的な医学を乗り越える試みであり、より具体的には、生きた身体を要素に分割する解剖学的な思考に代えて、有機体をひとつの全体としてとらえるホリスティックな知を目指したといえる<sup>17)</sup>。

このような傾向をもつロマン主義医学にとってブラウン学説が魅力的に映ったのは不思議ではない。実際、ブラウンによれば、病は胃や腸といった特定の部位に局在するものではなく、本質的に身体全体にかかわるものだという。傷や打撲といった外傷に由来する疾患を除けば、ほとんどの病気は全身病 *maladie générale* であり、その原因はひとえに興奮作用の過剰もしくは欠如に帰することができる。もちろん刺激がある部位に他より強く作用することは往々にしてあるものの、それを受容する興奮性自体は

「一にして不可分の特性<sup>18)</sup>」であり、有機体の全体がつねに影響をこうむることにはかわりがない。要するに身体はひとつのまとまったシステムとして刺激に反応するのであり、それ故、カタルも胸膜炎も同じ衰弱剤で、あるいは消化不良も胃欠熱も同じ刺激剤で治癒可能だとされる<sup>19)</sup>。また、病があくまで総体としての生命にかかわるものである以上、解剖学の知見に多くを望めないのも当然である。この意味で、あえてモルガーニ(1682-1771)の名を引きつつ、「全身病の起源を死体の上に見つけようと期待してはならない<sup>20)</sup>」と戒める言葉には、このイタリアの医師によって確立された病理解剖学に対する根本的な異議申し立てを見ることができよう。

ブラウン医学をドイツに導入するにあたって、C・H・ブファフ(1773-1852)やアンドレアス・レシュラウプ(1768-1835)といったシェリングの周辺にいた医師たちが中心的な役割をはたしたことはよく知られている。後に自ら『医学年報』(1805-1808)を編集刊行することになるこの自然哲学者が、彼らの著作を通じて、どのようにブラウンの理論を取り入れ、そこから独自の有機体論を練り上げていったかについてはすでに少なからぬ先行研究があり<sup>21)</sup>、ここであらためて取り上げるまでもないだろう。ポイントになるのは「興奮性」の概念をどう解するかであり、ブラウンが外部からの刺激への反応というもっぱら受動的な意味をこれに与えていたのに対し、シェリングはさらに「感受性」を介した有機体の能動的活動を加えることで、興奮性を「二重性」のもとにとらえ直そうとする<sup>22)</sup>。この違いは要するに、経験的な医学の説明には飽きたらない自然哲学の思弁性を示しているともいえようが、とりあえずここでは、シェリングが初めてブラウンに言及した『宇宙霊について』(1798)の一説を引用しておきたい。

ブラウンは興奮性という言葉で動物の生命における端的な受動を考えた。しかし、端的な受動を考えるなどということは自然のうちではナンセンスである。ところがこの概念が総合的だと仮定すれば、興奮性が表現するのは生命のすべての消極的な条件に共通のもの以外のなにもでもない。ブラウン謂うところの興奮力 [= 刺激 (論者注)] なるものも当然これに属する。したがって、生命の本来の積極原理の座ははまだ空いたままである<sup>23)</sup>。

シェリングの有機体論は、経験主義的なブラウン医学の関心の外にある「生命の本来の積極原理」をめぐる展開される。自然哲学者の目には、スコットランドの医師は「生命の最高原理」を見出すどころか、むしろ「最

低の段階に留まっていた」と映るのであり、ブラウンをすぐれた「疾病分類学者」として評価しつつも、刺激を生命の積極的な原理と混同することにより生命過程の本質を見誤ったとあって非難する<sup>24)</sup>。この辛辣な物言いは、二人の著者の属する歴史性、すなわちあくまで啓蒙の時代の申し子であったブラウンと、ロマン主義的な風土のなかで普遍学を志向したシェリングとの相違に起因すると考えてよいだろう。いわば前者が歩みを止めた地点から後者は出発するのであり、ドイツ・ロマン主義によるブラウン学説の受容は、そもそもの初めから医学理論の哲学的拡張をともなっていたのである。そのことをより詳しく見るために、ここでもう一人の作家を召喚したい。

### 3. 興奮性と環境

一種のメタ科学的な野心をもつ自然哲学が生命の理論に関心を向けるのは当然だとして、ドイツのロマン主義の特徴は詩人や小説家といった文学者も科学に真剣に取り組んだことである。最も有名なのは卓越した自然科学者でもあったゲーテの例だが、ここでは特にノヴァーリス(1772-1801)に着目したい。この早世した『夜の讃歌』の詩人は、同時に鉱山技師でもあり、フライベルクの鉱山学校で高名な地質学者A・G・ヴェルナーの教えを受けていた。さらに興味深いことには、文字通り百科全書的な好奇心の持ち主であったノヴァーリスは、1798年8月から翌年3月にかけて「百科全書学のための資料集」という副題をもつ『一般草稿』を執筆している。計1151の断章からなるこの未完の覚書は、哲学、文献学、宗教から数学、物理学、化学まで文字通り知のあらゆる領域をカバーするものであり、もちろん医学・生理学もその中に含まれている。ところで、この分野におけるノヴァーリスの特権的な参照項がまさしくブラウン学説であり、少なからぬ数の断章が興奮性の理論の吟味にあてられていることは注目に値する。以下、いくつかの断章を取り上げながら、詩人が医学理論に何を読み込んだのかを明らかにしてみたい。

ノヴァーリスがブラウン学説を発見したのは、1797年秋のことらしい。はたして『医学要覧』そのものに目を通したのか、あるいは前出のレシュラウプあたりの著作を通じて知ったのかは詳らかにしないが、自身結核で苦しんでいた作家が、スコットランドの医師の勧める刺激療法にひかれた事情はよく理解できる。事実、病気と過労によって消耗した体力を回復させるために強壯剤として麻薬に頼っていたようであり、現在の目から見れば

ば、それがかえって死期を早めたことは十分にありうることに思われる。ただ、我々にとってより本質的なのは、興奮性についての独創的な見解が『一般草稿』に残されていることであろう。次に引用するのは、その中でも最も重要な断章である。

ブラウンの興奮理論は、もはや好意的な光のもとに見ることができなくなったが、その根拠は以前とくらべてますます多くなってきている。

生命はまさに生命によってのみ——興奮は興奮によってのみ——説明される。すべての物質の力に対する関係が、客体の主体に対する関係にひとしいとすれば、物質と力は同じひとつの根源をもち、根底において統一されており、後になって分裂したことになる。

[…]

ブラウンの体系は、皮相な学問的刺激である。真の形式に似たものを有するが——その基礎となるものは誤りがある。

生命はたんに複雑な興奮なのか、あるいは高次の構成体なのか。興奮は刺激と刺激感受性とから構成されているのか<sup>25)</sup>。

ブラウン学説の根底的な再検討とも呼ぶべき断章 593 の冒頭部である。まずブラウンの理論に一定の留保がつけられた後、その基盤の脆弱性が指摘されている。ここで問題になっている欠陥がいかなるものかは、メモ風の記述のゆえに必ずしも明瞭ではないが、おそらく興奮作用の一方性にかかわるものだと考えてよいだろう<sup>26)</sup>。ブラウンは生命を興奮と同一視し、その働きを刺激に対する受動的な反応とみなしている。とはいえ、主体と客体が本来は分かつことができないように、物質と力も根底では一体であり、外部から加わる力 (= 刺激) とそれに反応する物質 (= 身体) をはっきり区別するのは誤っている。実際、ブラウンのようなとらえ方をする限り、別の断章 (721) に読まれるように、生命のメカニズムは多かれ少なかれ「力学的」なものとならざるをえず、量に還元されない質の問題はなおざりにされることになる<sup>27)</sup>。先ほど見たシェリングのブラウン批判にきわめてよく似た分析だが、実はノヴァーリスは 1798 年に出たばかりの『宇宙霊について』に関して詳細なノートを取っており、同じ年の 10 月以降に書かれたこれらの断章にそれが影響を与えていることはほぼ間違いない。いずれにせよ、上の引用で示唆されているのは、生命を一方的な複数の刺激の総和ととらえるのではなく、力と物質が融合した「高次の



構成体」として把握する必要性であろう。その時、生命は環境と結びついた双方向のかつ動的なシステムとして現れてくるはずだ。断章 593 の続きを読んでみよう。

空気は、血液とおなじく、人間の器官である。身体を世界から分離することは、魂を身体から分離するのとひとしい。

人間は、いわばある種の物体としてのゾーンをもっている——肉体は最も近いところにあるもので——まずその人間を取り囲む——二番目がその人間の住む町で、三番目が地方となる——そうやって太陽と太陽系まで進んでいく。最も親密なゾーンはいわば自我である——この最高の抽象であり、短縮形である自我に対するのが——最高の反省、拡張形、すなわち世界である。——つまり、点が大気圏に対するようなものである<sup>28)</sup>。

ノヴァーリスにとって、ブラウン学説の核心は、この医学理論が有機体を環境の中に置いて考察する可能性を示唆している点にあったと考えられる。もし生体を取り巻く多様な事物や自然がなければ、刺激が外からもたらされることもなく、従って、生命を支える興奮性は作用せずに、死がすべてを支配することになる。極言すれば、生氣論的な立場がしばしば主張するのは反対に、生命には厳密な意味での自律性は存在しないとさえいえるかもしれない。有機体はそれ自体で充足した閉じたシステムではなく、周囲の、それも様々なレベルの環境と絶えず相互に干渉しあっている。ノヴァーリスの言葉を借りれば、いわば自我を取り囲む複数のゾーン（領域）があるのであって、身の回りの自然や生活環境、自らが住んでいる町や地方、さらに究極的には地球全体、いや宇宙そのものが身体の延長とみなされうる。血液が人間の身体の一部であるように、外にある空気も、やはりそれなしでは生命がなりたたないという意味で、まさに人体の器官のひとつなのだ。ここに見られるのは、まぎれもないエコロジ的な発想だといえるだろう。

ロマン主義が、機械主義的な物質文明に対抗して、自然との調和をモットーとして掲げたことはよく知られている。ゲーテがニュートンを批判して用いた表現によれば、「自然を拷問台にかける<sup>29)</sup>」ことによってそれを支配しようとする近代科学は、世界の秩序を破壊するものであり、人間の度し難い傲慢を証し立てている。このように産業革命の勃発と同時代にすでに、ロマン主義者たちが行き過ぎたテクノロジーに警鐘を鳴らし、自然

との共生の必要を説いていたことの意義は計り知れない。だが一方で、これらの先駆的な思考がいやおうなく歴史的限界をかかえこんでいたことにも注意が必要であろう。たとえば、ロマン主義科学がさかんに持ち出すミクロコスモスとマクロコスモスというルネサンスから着想を得た図式もそのひとつであり、宇宙全体（マクロコスモス）をひとつの有機体とみなして、それをアナロジーによって人体（ミクロコスモス）の機能や構造と結びつける発想は、今日の我々の目には、この科学をオカルト的な古めかしいものに見せるという否定的な役割をはたしている。十九世紀後半の実証主義がロマン主義科学を排斥したのも、そこに前科学的な要素を見てとったからであり、その批判自体はしごく正当なものである。ただ、ロマン主義が分析的理性の濫用を告発するにあたって、乏しい概念装置しか持ち合わせていなかったのも確かであり、最新の科学的知識が人間性にもたらす歪みを是正するために、しばしば過去の秘教的な知に頼らざるをえなかったことを忘れてはならない。ブラウンの場合も同様に、その理論が結果的に生態学につながる射程を手に入れるのは、生理的・病理的現象のすべてを刺激の量の問題に帰するという極端な単純化を通じて、生命の原理を一度有機体の内部から外部の環境の方へとずらすことによってだったのである。

一般的に言って、ある意味では退行に思われる理論が、それが属する時代をはるかに超えて、未来においてその深い意義を開示するということはけっして珍しいことではなからう。ブラウンの興奮性理論に関していえば、その現代的な意義をいち早く見てとったノヴァーリスの慧眼は、やはりここで強調するに値する。ところで興味深いのは、このような認識のヒントになったのが、どうやらブラウン医学とは一見何の関係もなさそうなフィヒテの自我の哲学だったということだ。たとえば先ほど引用した断章593の主体と客体の根源的同一性に関する指摘は、明らかにフィヒテの超越論的自我を意識したものである。自我が自らの働きによって対象一般の地平を切り開くフィヒテの絶対的自由の理論が、シュレーゲルやノヴァーリスといったロマン主義の若い作家たちを熱狂的に引きつけたことは文学史の常識に属するが、『一般草稿』にも「フィヒテの自我は——ロビンソン・クルーソーのようなものであり——学問上の虚構である<sup>30)</sup>」(断章717)という記述が見られる。他にもフィヒテとブラウンの名を結びつけた断章は少なからずあるのだが、つまるところ、このどちらの体系も主体(自我、生命)と客体(自然、環境)を統一的に把握するためのそれぞれ

異なる、だがともに有効な手段とみなされていると考えてよいだろう。次に引用するのは、『一般草稿』以前、1798年の前半に書かれた断章である。

自我とは、個人的自由の領域もしくは自己活動の領域を選択し、実現することの謂である。フィヒテは、ブラウンのようにことを進めた——ただもっと普遍的で絶対的であったが<sup>31)</sup>。

ノヴァーリスがフィヒテ哲学に見てとったのが、自我を起点に経験の全地平が立ち現れてくる光景だとすれば、逆にブラウン医学からは、人間を含めた生物と自然の全体とをつなぐエコロジー的な発想を学んだのだといえよう。事実、ノヴァーリスにとって、個人と宇宙は刺激という同一の原理に貫かれており、あらゆるレベルで緊密に依存しあっている。そもそも興奮性としての生命をそなえているのは我々人間のような有機体にとどまらず、岩石や金属などの無機物も、ごくわずかにではあるが刺激に反応するとされる。要するに宇宙全体が高次の有機体だというのが、ノヴァーリスがブラウン学説を意図的に拡大解釈しつつ引き出す結論なのだ。断章1102にある「世界の興奮現象<sup>32)</sup>」という表現に端的に見てとれるように、興奮性の原理は万物に適用可能である。物活論を想起させるこの特異な生命観の一例として、『サイスの弟子たち』の次の一節を挙げることもできるだろう。この未完の小説の「補遺」にあたる断章である。

岩石火成論者と岩石水成論者の地質学論争は、本来、大地の始まりは昂進的（ステニー）であったか、無力的（アステニー）であったかをめぐる論争である<sup>33)</sup>。

まず、ステニーとアステニーがブラウン学説の用語であることに注意しよう。火成論と水成論は地球の起源をめぐる二つの仮説であり、十八世紀末から十九世紀前半にかけて激しい論争を繰り返した。火成論が地球内部の火の作用、つまり火山の噴火に岩石の起源を見るのに対し、水成論によれば、岩石は海底に沈殿してできた堆積物である。水成論の提唱者ヴェルナーがノヴァーリスら多くのロマン主義者たちの師であったという事情も手伝って、当時この論争は地質学者の枠を超えて、広く耳目を集めたことが知られている。ノヴァーリスも自身の小説のなかで何らかの形でこれを扱うつもりだったわけだが、やはり注目すべきは地質学の理論をブラウン

医学の用語を用いて解釈している点だろう。地球の始まりは大地の興奮作用に起因するという突飛な発想は、決して奇をてらったものではなく、この作家の自然哲学的な思想から自ずと出てくるものだ。この思想によれば、興奮性は普遍的な生命原理であり、それを駆動させる刺激は自然のいたるところに遍在している。再び『一般草稿』の記述に戻れば、「世界は巨大人間である」ともいえるだろう。その解明のために要請される「通常の自然学」を超越した「高次の自然学<sup>34)</sup>」が、ブラウン学説を乗り越えるものとして想定されていることは言うまでもない。

では最後にもう一度、世界のなかの人間の位置を確認しておきたい。もはやそれが刺激をこうむるだけの受け身の存在ではありえないというのは、いまや明白であろう。

人間は力の（尽きせぬ）源——あるいは力の産出過程であり——光との比較がここでは完全にふさわしい<sup>35)</sup>。

『一般草稿』のほぼ末尾に位置する断章（1148）からの引用である。この断章そのものは興奮性の概念を出発点に、刺激にともなう力の伝達について考察したものであり、当然のごとくブラウン医学に関する分析もある。引用したのは断章全体の結論部であるが、人間の身体を力のアレンジメントが行われる場としてとらえる発想は、ある種の現代思想を思わせなくもない。実際、興奮性の理論が説くように、人間はたえず周囲の環境から刺激を受けつつも、同時にそれを力に変換し、なおかつ増幅させる能力をそなえている。ちょうど光がエネルギーを生み出すように、人間も自ら力を産出することで、普遍的な自然の生に能動的に参加しているのだ。人間を光になぞらえるこの鮮烈なイメージは、それが本格的な近代社会のとは口に生きた博識の若き詩人によって書きとめられた事実を思う時、その後の世界の歴史の混迷を知る我々にとって、苦いアイロニーを感じさせるものかもしれない。いずれにせよ、ドイツ・ロマン派によるブラウン学説の受容は、その固有の歴史的な文脈を超えて、現代という時代にも重い問いを投げかけているといえるだろう。

#### 注

- 1) Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, édition mise à jour par Stéphanie Dord-Crouslé, Flammarion, « GF », 2008, p. 120. 翻訳はギユスターヴ・

- フローベール, 『ブヴァールとベキュシェ』, 菅谷憲興訳, 作品社, 2019年, p. 93.
- 2) ニュートンが天体のあらゆる運動を万有引力という唯一の原理に結び付けたように, 「私自身も, これまで認められてきた様々な体質や体格などの代わりに, すべての個人は同じ有機的素質をそなえているということを発見した」とある (John Brown, *Éléments de médecine*, traduits de l'original latin avec des additions et des notes de l'auteur, d'après sa traduction anglaise, par Fouquier, Paris, Demonville et Gabon, 1805, p. 199). ブラウンからの引用はこのフランス語訳を用いる.
  - 3) *Ibid.*, p. xxxii.
  - 4) ブラウン学説の解説としては, 次の二つの文献を参照. Charles Daremberg, *Histoire es sciences médicales comprenant l'anatomie, la physiologie, la médecine, la chirurgie et les doctrines de pathologie générale*, Paris, J.-B. Baillière et fils, 1870, t. 2, p. 1120-1147; Georges Canguilhem, *Idéologie et rationalité dans l'histoire des sciences de la vie*, J. Vrin, 1988, p. 47-54.
  - 5) J. Brown, *op. cit.*, p. 43.
  - 6) *Ibid.*, p. 411.
  - 7) *Ibid.*, p. 6.
  - 8) ニュートンが『プリンシピア』の第二版(1713)に付け加えた「一般注」のなかに読まれる「私は仮説をつくらない」という有名な言葉は, 啓蒙の時代以降, 多くの科学者の座右の銘として, 実証主義的な思考の発展を支えたことが知られている. たとえばこの後出てくるビシャも, 『生理学と医学に応用された一般解剖学』(1801)のなかで, はっきりとニュートンの名を挙げて自らの方法論を開陳している (Xavier Bichat, *Recherches physiologiques sur la vie et la mort (première partie) et autres textes*, présentation et notes par André Pichot, Flammarion, « GF », 1994, p. 219).
  - 9) J. Brown, *op. cit.*, p. 4.
  - 10) X. Bichat, *op. cit.*, p. 57.
  - 11) Ch. Daremberg, *op. cit.*, p. 1127.
  - 12) J. Brown, *op. cit.*, p. 254.
  - 13) *Ibid.*, p. 96.
  - 14) この問題を中心的に扱っているのが, 次の文献である. Georges Canguilhem, *Le normal et le pathologique*, PUF, 1966.
  - 15) ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ, 『色彩論』, 第一巻, 高橋義人・前田富士夫訳, 工作社, 1999年, p. 20.
  - 16) シェリング, 『学問研究法に関する講義』, 浅沼光樹・加國尚志・澁谷理江訳, 『シェリング著作集 1b 自然哲学』, 燈影舎, 2009年, p. 273.

- 17) ロマン主義医学については、それぞれ医学史と思想史の立場から書かれた次の二つの論考を参照。Nelly Tsouyopoudos, « La philosophie et la médecine romantiques », dans *Histoire de la pensée médicale en Occident*, sous la direction de Mirko D. Grmek, Seuil, t. 3, 1999, p. 7-27 ; Georges Gusdorf, *Le romantisme*, Payot, 2011, t. II, p. 247-299.
- 18) J. Brown, *op. cit.*, p. 48.
- 19) *Ibid.*, p. 67.
- 20) *Ibid.*, p. 84.
- 21) たとえば次の論文を参照。長島隆, 「ブラウン説とシェリング, ヘーゲル」, 『日本医科大学基礎科学紀要』, 10号, 1990年, p. 24-43.
- 22) シェリング, 「自然哲学体系の第一草案」, 澁谷理江訳, 前掲書, p. 160.
- 23) シェリング, 「宇宙霊について」, 松山壽一訳, 同書, p. 134.
- 24) 同書, p. 134-135.
- 25) 『ノヴァーリス作品集』, 今泉文子訳, ちくま文庫, 第3巻, 2007年, p. 237-238. 『一般草稿』については日本語版全訳はまだ存在しないため, 以下, 和訳がない断章を引用する場合はフランス語訳から重訳する.
- 26) 「人間もしくは動物の総合的, 同時的な興奮性. 同時的な複数の刺激——同時的かつ総合的な合成的刺激作用. ブラウンの一方方向性を参照のこと。」(断章 267 ; Novalis, *Le Brouillon général*, traduit de l'allemand par Olivier Schefer, édition revue et augmentée, Éditions Allia, 2015, p. 73-74.)
- 27) 「治療法と力学的または化学的説明法. ブラウンの体系においてその成り立ちゆえに独自であり間違っているものとは, 力学へのその傾斜である. (フィヒテにおけると同様に) 当時の支配的な体系, すなわち化学的な説明に反対することから始めたブラウンは, 古い体系の欠陥についての適切な評価, および理論の拡張のすぐれた予見にもかかわらず, 逆の行き過ぎに陥ってしまった——力学的な体系へと。」(*Ibid.*, p. 201-202.)
- 28) ノヴァーリス, 前掲書, p. 240.
- 29) ゲーテ, 前掲書, p. 386.
- 30) ノヴァーリス, 前掲書, p. 262.
- 31) 『ノヴァーリス作品集』, 第1巻, 2006年, p. 238.
- 32) 『ノヴァーリス作品集』, 第3巻, p. 294.
- 33) 『ノヴァーリス作品集』, 第1巻, p. 84.
- 34) 断章 407 ; Novalis, *op. cit.*, p. 104-105.
- 35) *Ibid.*, p. 277.